

# 令和8年度 農作物病虫害発生予察情報 発生予報 第2号（6月予報）

令和8年5月26日 秋田県病虫害防除所

◇今回の予報対象期間は6月を主とします。次回の発表は令和8年6月30日の予定です。

◇病虫害発生予察情報は秋田県公式ウェブサイトでご覧いただけます。

<https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>

◇最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」で確認してください。<https://pesticide.maff.go.jp/>

◇秋田県では「秋田県総合防除計画」を策定し、化学農薬のみに依存しない総合防除を推進しています。病虫害を防除する場合は、本計画を参照し総合防除に取り組んでください。本計画は秋田県公式ウェブサイトでご覧いただけます。

<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/4233>



秋田県病虫害防除所  
トップページ

## I. 予報の要点

水 稲	いもち病の感染時期はやや早いと予想されます。余り苗は直ちに処分してください。また、水面施用剤（オリゼメート粒剤）を使用する場合は、移植栽培では6月15日頃、直播栽培では6月23日頃に散布してください。 斑点米カメムシ類（第1世代）の発生時期は早い、発生量は平年並と予想されます。水田除草剤を適切に使用し、アカスジカスミカメの侵入原因となる水田内のホタルイなどのカヤツリグサ科雑草やノビエの除草を確実に行ってください。 農道・畦畔、休耕田などの除草を行ってください。
畑 作	小麦では、赤かび病の発生量がやや少ないと予想されますが、まだ防除を行っていない場合は、直ちに防除してください。 大豆では、ネキリムシ類の発生量がやや少ないと予想されます。播種前には場内やほ場周辺の雑草処理を行うほか、例年被害が見られるほ場では、クルーザーMAXXなどにより防除してください。
野 菜	キャベツでは、コナガの発生量が多いと予想されます。防除対策情報第2号を参照し、防除対策を徹底してください。
花 き	りんどうでは、リンドウホソハマキの発生が早いと予想されます。ほ場をよく観察し、成虫又は潜葉痕及び食害痕が認められたら、直ちに薬剤で防除を行ってください。
果 樹	りんごでは、果樹カメムシ類の発生量が多いと予想されます。園内への飛来時期や飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察し、飛来量が多い場合は薬剤で防除を行ってください。

## Ⅱ. 主要病害虫の向こう 1 か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
水 稲	いもち病 (葉いもち)	全県	やや早い	—	やや多い
	ばか苗病	全県	—	多い	多い
	イネミズゾウムシ	全県	早い	—	平年並
	イネドロオイムシ	全県	やや早い	—	多い
	イネミギワバエ (第2世代) (イネヒメハモグリバエ)	全県	早い	—	多い
	斑点米カメムシ類 (第1世代) (アカスジカスミカメ) (アカヒゲホソミドリカスミカメ)	全県 全県 全県	早い 早い 早い	— — —	平年並 やや少ない やや多い
	フタオビコヤガ (第1世代) (イネアオムシ)	全県	やや早い	やや少ない	やや少ない
小 麦	赤かび病	全県	早い	—	やや少ない
	うどんこ病	全県	—	—	平年並
大 豆	ネキリムシ類	全県	早い	—	やや少ない
	食葉性鱗翅目幼虫	全県	—	—	平年並
ね ぎ (夏どり)	べと病	全県	—	平年並	平年並
きゅうり	黒星病	全県	—	—	少ない
キャベツ (初夏どり)	菌核病	全県	—	平年並	平年並
	コナガ	全県	—	多い	多い
	モンシロチョウ	全県	—	やや少ない	平年並
	ヨトウガ (第1世代)	全県	—	平年並	やや多い
えだまめ	ネキリムシ類	全県	早い	—	やや少ない
	食葉性鱗翅目幼虫	全県	—	—	平年並
りんどう	葉枯病	全県	—	やや少ない	平年並
	リンドウホソハマキ (第1世代)	全県	早い	平年並	平年並
	ハダニ類 (ナミハダニ)	全県	—	やや少ない	平年並

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
りんご	斑点落葉病	全県	早い	—	平年並
	モニリア病 (実(株)ぐされ)	全県	—	やや多い	多い
	黒星病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	炭疽病	全県	早い	—	平年並
	輪紋病	全県	早い	—	やや多い
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	全県	早い	—	平年並
	ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	全県	—	やや少ない	平年並
	ハマキムシ類 (リンゴコカクモンハマキ、 ミダレカクモンハマキ、 リンゴモンハマキ)	全県	—	多い	多い
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	全県	—	多い	多い
キンモンホソガ (第2世代)	全県	—	多い	平年並	
なし (日本なし)	黒星病	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
	黒斑病	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
	輪紋病	県北部・県中央部	やや早い	—	平年並
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	県北部・県中央部	早い	—	平年並
	ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
	ハマキムシ類 (リンゴコカクモンハマキ、 リンゴモンハマキ)	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	県北部・県中央部	—	少ない	やや少ない
ぶどう	べと病	県南部	早い	平年並	平年並
	芽枯病	県南部	早い	やや少ない	やや少ない
	灰色かび病	県南部	—	平年並	平年並
	晩腐病(花蕾発病)	県南部	—	—	やや少ない
	アザミウマ類 (チャノキイロアザミウマ)	県南部	早い	平年並	やや多い
飼料作物	アワヨトウ(第1世代)	全県	—	—	平年並

### Ⅲ. 発生予報と防除対策

#### A 水稻

病虫害名	予報内容	
	感染時期	感染量
1 いもち病（葉いもち） （全般発生開始期）	やや早い（－）	やや多い（－）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/±）。

イ 育苗期巡回調査（5月2～3半旬）における苗いもちの発病箱率、発病地点率はいずれも0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。育苗施設内外の稲わら及び籾殻の確認地点率は3.5%（平年2.6%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 余り苗は、直ちに泥に埋めて処分する。

イ ベンレート水和剤又はビームゾルによる育苗期のいもち病防除を実施しなかった場合、感染苗の持ち込みや、早期に伝染する可能性があるため、余り苗や本田をよく観察して発病の有無を確認する。

ウ 乾燥状態で保管された稲わらや籾殻は本病の伝染源となるので、これらを使用した野菜ほ場の周辺では葉いもちが早期に発病していないか確認する。

エ 葉いもち防除として箱施用剤や側条施用剤を使用しなかったほ場では、オリゼメート粒剤を10a当たり2kg散布する。散布時期は、移植栽培では6月15日頃（6月12～18日）、直播栽培では6月23日頃（6月20～25日）である。

オ 箱施用剤や側条施用剤を使用していないほ場では、感染苗の持ち込みなどにより早期に本田で発病することがある。6月15日までに発病を確認した場合は、直ちにオリゼメート粒剤を散布し、その15～20日後にも同剤を散布する。6月15日以降に発病を確認した場合は、オリゼメート粒剤の散布に加え、予防剤と治療剤の混合剤（ブラシン剤又はノンブラス剤）の茎葉散布を行う。その後、必要に応じてビーム剤を追加散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2 ばか苗病	－	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア 育苗期巡回調査（5月2～3半旬）における発病箱率は2.6%（平年1.5%）でやや高く、発病地点率は22.1%（平年9.3%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 採種ほ周辺のほ場で発病茎を見つけたときは、速やかに株ごと抜き取り、泥に埋めて処分する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3 イネミズゾウムシ	早い（前年より早い）	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（－/+）。

イ 有効積算温度計算シミュレーション（J P P - N E T、気象観測地点：秋田）による越冬後成虫の侵入盛期は5月31日（平年6月7日）、密度盛期は6月4日（平年6月11日）と推定される（- / -）。

ウ 5月1～3半旬の予察灯（5地点）における越冬後成虫の総誘殺数は0頭（平年1.5頭）でやや少なかった（ / -）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 6月上旬に越冬後成虫が1株当たり0.3頭（食害株率90%以上に相当）以上の場合は、トレボン粒剤で防除する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4 イネドロオイムシ	やや早い（-）	多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（- / ±）。

イ 前年の発生量から、越冬量は多いと推定される（ / +）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 産卵盛期（6月上～中旬）の卵塊数が1株当たり0.5を超える場合は、ふ化盛期（6月中旬）に茎葉散布剤で防除する。ただし、RACコード1A、1B、2Bの薬剤に対する感受性が低下している地域では、トレボン粉剤DLを使用する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
5 イネミギワバエ（第2世代） （イネヒメハモグリバエ）	早い（-）	多い（-）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並、日照時間はほぼ平年並と予報されている（- / -）。

イ 有効積算温度計算シミュレーション（J P P - N E T、気象観測地点：秋田）による第2世代幼虫の発生時期は6月8日（平年6月16日）と推定される（- / -）。

ウ 5月4半旬の巡回調査（沿岸部19地点）では、52.6%の地点で産卵が確認され、要防除水準（株当たり卵数が1.5個又は産卵株率が50%）を超えるほ場が1地点確認された。また、1株当たり卵数は平均0.29個で、2016～2025年の平均（0.15個）と比較して多かった。同様に産卵株率は平均9.3%で、2016～2025年の平均（5.5%）と比較して高かった（ / +）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 5月21日発表の防除対策情報第3号を参照して防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 斑点米カメムシ類 (第1世代)  (アカスジカスミカメ)  (アカヒゲホソミドリカスミカメ)	早い (前年よりやや早い)  早い (前年よりやや早い)  早い (前年よりやや早い)	平年並 (前年並)  やや少ない (前年より少ない)  やや多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(－/±)。
- イ 牧草地すくい取り調査(3地点)におけるアカスジカスミカメの越冬世代幼虫の平均初確認日は5月8日(平年5月24日)、アカヒゲホソミドリカスミカメの越冬世代成虫の平均初確認日は5月18日(平年5月26日)でいずれも早かった(－/ )。
- ウ 前年収穫期に行った畦畔すくい取り調査から、アカスジカスミカメの越冬量はやや少ない( /－)、アカヒゲホソミドリカスミカメの越冬量はやや多いと推定される( /+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 6月上旬から繁殖地となる農道・畦畔、休耕田などの除草を地域でまとまって行う。
- イ 水田除草剤を適切に使用し、アカスジカスミカメの侵入原因となる水田内のホタルイなどのカヤツリグサ科雑草やノビエの除草を確実にを行う。雑草の生育状況を確認し、水田除草剤の処理時期が遅れないようにする。
- ウ 一発処理除草剤のフロアブル剤、顆粒水和剤、ジャンボ剤及び少量拡散型粒剤は、藻類・表層はく離がほ場の30%以上発生しているほ場では拡散性が劣るので、散布は藻類・表層はく離の発生前から発生初期までとする。
- エ 一発処理除草剤の処理時期の遅れなどにより残草が多い場合は、草種に応じた中・後期剤を適切に散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7 フタオビコヤガ (第1世代) (イネアオムシ)	やや早い(－)	やや少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(－/±)。
- イ 育苗期巡回調査(5月2～3半旬)における育苗施設内の成虫数は0頭(平年0.1頭)でやや少なく、卵確認地点率は0%(平年2.7%)でやや低かった( /－)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア フェルテラ剤(ブイゲットフェルテラ粒剤、Dr.オリゼフェルテラ粒剤など)、スピノ剤(プリンススピノ粒剤6、ルーチンアドスピノ箱粒剤など)のいずれも施用せず、食害が多く実害を生じるおそれがある場合は、6月上旬にチューンアップ顆粒水和剤、トレボン粉剤DL、パダン粉剤DLのいずれかを散布する。

### 8 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
縞葉枯病	—	—	平年並	防除が必要なほ場はないと見込まれる。
ニカメイガ (2回発生地帯の 第1世代)	—	—	平年並	防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。

## B 小麦

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 赤かび病	早い(—)	やや少ない(前年並)

#### (1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(—/±)。
- イ 秋田地域振興局管内における出穂期(品種:銀河のちから)は5月7日(平年差-1日)、仙北地域振興局管内における出穂期(ネバリゴシ)は5月12日(平年差-4日)、平鹿地域振興局管内における出穂期(ネバリゴシ)は5月12日(平年差-5日)だった(—/ )。
- ウ 出穂後の5月上~中旬の降水量から、感染量は少ないと推定される( /- )。

#### (2) 防除上注意すべき事項

- ア 生育が遅く、まだ防除を行っていない場合は、直ちにシルバキュアフロアブル(RACコード:3)又はストロビーフロアブル(同:11)を散布する。その後7~10日後に2回目の防除をする。
- イ 2回目の防除は、シルバキュアフロアブル、ストロビーフロアブル、トップジンM水和剤(RACコード:1)、トップジンM粉剤DL(同:1)、イオウフロアブル(同:M2)、石灰硫黄合剤(同:M2)のいずれかを散布する。ただし、1回目と同じ薬剤は使用しない。
- ウ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが1、3、11の薬剤は連用を避ける。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2 うどんこ病	—	平年並(前年よりやや多い)

#### (1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている( /+ )。
- イ 前年乳熟期の発生量から、越冬伝染源量はやや少ないと推定される( /- )。

#### (2) 防除上注意すべき事項

- ア 本病は赤かび病と同時防除が可能である。

### 3 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
さび病類 (赤さび病)	—	—	平年並	赤かび病との同時防除が可能である。

## C 大豆

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 ネキリムシ類	早い（－）	やや少ない（前年よりやや少ない）

### (1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/±）。
- イ 有効積算温度計算シミュレーション（JPP-NE T、気象観測地点：秋田）によると、大豆の茎を切断できるタマナヤガ4齢幼虫の発生時期は6月9日（平年6月17日）と予想される（－/ ）。
- ウ 秋田市予察ほのフェロモントラップにおける4月1半旬～5月4半旬のタマナヤガの総誘殺数は61頭（平年56.6頭）で平年並（ /±）、カブラヤガの総誘殺数は43頭（平年70.3頭）でやや少なかった（ /－）。

### (2) 防除上注意すべき事項

- ア タマナヤガはタデ、アカザなどの広葉雑草に産卵し、カブラヤガは雑草の枯葉に産卵するので、播種前には場内やほ場周辺の除草を行う。
- イ 例年被害が見られるほ場では、次のいずれかの方法で防除する。
- ① クルーザーFS30又はクルーザーMAXXを種子に塗沫処理して播種する。
  - ② 播種時にカルホス粉剤又はカルホス微粒剤Fを作条施用し、土壌混和する。
  - ③ 播種時～本葉2葉期にカルホス粉剤又はネキリエースKを株元の土壌表面に散布する。
- ウ タマナヤガは飛来性害虫であり、今後も飛来数が増加することがあるので、今後の予察情報などに注意する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2 食葉性鱗翅目幼虫	－	平年並（－）

### (1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

### (2) 防除上注意すべき事項

- ア ツメクサガは年2回発生し、第1世代幼虫は主に6～7月に発生する。葉脈を残して葉を食害するので、ほ場をよく観察する。
- イ 発生が多い場合は、ツメクサガ幼虫の発生初期（若齢期）にエルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブル、ブロフレアSC、ヨーバルフロアブルを散布する。

## D ねぎ（夏どり）

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 べと病	－	平年並（前年並）

### (1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 5月4～5半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 気温が15℃前後で降雨が続くと発病しやすく、被害の拡大が早い。定期的にダコニール1000（RACコード：M5）などを散布し、予防に努める。
- イ 発病が見られたらオロンディスウルトラSC（RACコード：40・49）、ザンプロDMフロアブル（同：40・45）、リドミルゴールドMZ（同：4・M3）などを散布する。
- ウ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが4、11、27、40、45、49の薬剤は連用しない。

## E きゅうり

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 黒星病	—	少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /-）。
- イ 前年9月の発生量から、越冬伝染源量はやや少ないと推定される（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 本病は冷涼多湿条件で発病が多く、県北部で発生しやすい。
- イ 多発すると薬剤による防除が難しくなるため、発病前から定期的にジマンダイセン水和剤（RACコード：M3）、ダコニール1000（同：M5）などを散布し、予防に努める。特に、前年秋に発病が多かったほ場では定植直後から防除を開始する。
- ウ 発病を確認した場合は、茎葉、果実、巻きひげなどの発病部位を取り除き、速やかにファンベル顆粒水和剤（同：M7・11）、スコア顆粒水和剤（同：3）、トップジンM水和剤（同：1）、ベンレート水和剤（同：1）などを散布する。
- エ 耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

## F キャベツ（初夏どり）

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 菌核病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 5月4半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 前年に発病が見られたほ場では、結球始期からスミレックス水和剤、ネクスターフロアブル、パレード20フロアブルなどを散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2 コナガ	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 能代市防除適期決定ほのフェロモントラップにおける5月1～3半旬の誘殺数は360頭（平年

131.2頭)で多かった( /+ )。

ウ 予察灯調査(5地点)において、5月1～3半旬の誘殺数の合計は32頭(平年42.6頭)で平年並だった( /± )。

エ 5月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.06頭(平年0.02頭)で多かった( /+ )。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 5月14日発表の防除対策情報第2号を参照し、防除対策を徹底する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3 モンシロチョウ	—	平年並(前年並)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている( /+ )。

イ 5月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は、0頭(平年0.01頭)でやや少なかった( /- )。

(2) 防除上注意すべき事項

ア コナガとの同時防除に努める。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4 ヨトウガ(第1世代)	—	やや多い(前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている( /+ )。

イ 5月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は、0頭(平年0頭)で平年並だった( /± )。

(2) 防除上注意すべき事項

ア コナガとの同時防除に努める。

## G えだまめ

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 ネキリムシ類	早い(-)	やや少ない(前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(-/±)。

イ 有効積算温度計算シミュレーション(JPP-NE T、気象観測地点:秋田)によると、大豆の莖を切断できるタマナヤガ4齢幼虫の発生時期は6月9日(平年6月17日)と予想される(-/ )。

ウ 秋田市大豆予察ほのフェロモントラップにおける4月1半旬～5月4半旬のタマナヤガの総誘殺数は61頭(平年56.6頭)で平年並( /± )、カブラヤガの総誘殺数は43頭(平年70.3頭)でやや少なかった( /- )。

(2) 防除上注意すべき事項

ア タマナヤガはタデ、アカザなどの広葉雑草に産卵し、カブラヤガは雑草の枯葉に産卵するので、

播種前には場内やほ場周辺の除草を行う。

イ 例年被害が見られるほ場では、次のいずれかの方法で防除する。

- ① クルーザー F S 30又はクルーザー M A X Xを種子に塗沫処理して播種する。
- ② 播種時にカルホス粉剤又はカルホス微粒剤 F を作条施用し、土壌混和する。
- ③ 播種時～本葉 2 葉期にカルホス粉剤又はネキリエース K を株元の土壌表面に散布する。

ウ タマナヤガは飛来性害虫であり、今後も飛来数が増加することがあるので、今後の予察情報などに注意する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2 食葉性鱗翅目幼虫	—	平年並 (—)

(1) 予報の根拠

ア 向こう 1 か月の降水量はほぼ平年並と予報されている ( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア ツメクサガは年 2 回発生し、第 1 世代幼虫は主に 6～7 月に発生する。葉脈を残して葉を食害するので、ほ場をよく観察する。

イ 発生が多い場合は、ツメクサガ幼虫の発生初期 (若齢期) にアディオソ乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブル、ブロフレア S C、ヨーバルフロアブルを散布する。

## H りんどう

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 葉枯病	—	平年並 (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア 向こう 1 か月の降水量はほぼ平年並と予報されている ( /±)。

イ 前年の発生量から、越冬伝染源量は多いと推定される ( /+)。

ウ 5 月中旬の巡回調査における発病茎率は 7.0% (平年 10.7%) でやや低かった ( /-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 過剰な追肥を控え、過繁茂を避ける。

イ オンリーワンフロアブル (R A C コード : 3)、チオノックフロアブル (同 : M3) などの薬剤で防除するが、花の汚れを避けるためにオーソサイド水和剤 80 (同 : M4) や Z ボルドー (同 : M1) は着蕾期以降使用しない。

ウ 降雨が多いと予想される場合は、散布間隔を短くする。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2 リンドウホソハマキ (第 1 世代)	早い (—)	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア 向こう 1 か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (—/ )。

イ 有効積算温度計算シミュレーション (J P P - N E T、気象観測地点 : 秋田) による越冬世代成虫の羽化始期は 5 月 22 日 (平年 6 月 1 日) と推定された (—/ )。

ウ 5月中旬の巡回調査における発生茎率は0%（平年0.04%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 茎部に食入後の薬剤防除は難しいため、生長部被害を見つけたら折り取り、土中に埋めるなど適切に処分する。

イ ほ場をよく観察し、成虫又は潜葉痕及び食害痕が認められたら、直ちにアディオフロアブル（RACコード：3A）、ディアナSC（同：5）、フェニックス顆粒水和剤（同：28）などの薬剤で防除する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3 ハダニ類（ナミハダニ）	—	平年並（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ 5月中旬の巡回調査における発生茎率は0%（平年0.7%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発生初期に直ちにカネマイトフロアブル（RACコード：20B）、コロマイト水和剤（同：6）、バロックフロアブル（同：10B）などを散布する。

イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

## I りんご

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 斑点落葉病	早い（前年並）	平年並 （前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ -/±）。

イ ふじの落花期はかづの果樹センター（鹿角市）が5月13日（平年差-4日）、果樹試験場（横手市）が5月7日（平年差-5日）だった（ -/ ）。

ウ 前年の発生量から、越冬伝染源量は平年並と推定される（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 防除薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

イ 高温・多雨の多発条件下では、ユニックス顆粒水和剤47（RACコード：9）を保護殺菌剤に加用して使用する。ただし、耐性菌の出現を回避するため他の防除時期を含め1回の使用とする。

ウ QoI剤（RACコード：11）は耐性菌の出現を回避するため、2回以内の使用とし、ベルコート水和剤、有機銅剤などに加用する。

エ 以下の各薬剤を使用する際は、次の点に注意する。

① オキシラン水和剤、キノンドーフロアブル、ドキリンフロアブルは、落花直後～落花20日後頃の使用は避ける（サビ果）。

② パスポート顆粒水和剤は、開花直前～落花20日後頃の使用は避ける（サビ果）。

③ ダイパワー水和剤、ベルコート水和剤は、芽出し2週間後～落花25日後頃の使用は避ける（サビ果）。

④ ストライド顆粒水和剤は、開花後～落花30日後の使用は避ける（サビ果）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 モニリア病 (実(株)ぐされ)	—	多い(前年並)

(1) 予報の根拠

ア 5月中旬の巡回調査における実(株)ぐされ発病果そう率は0.4%(平成0.1%)で高く、同地点率は15.0%(平成8.4%)でやや高かった( /+ )。

イ 開花期間中のうち4月6半旬から5月1半旬の降水量から、感染量は多いと推定される( /+ )。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 実(株)ぐされは見つけ次第、摘み取って焼却するか土中に埋める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 黒星病	—	やや少ない (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平成並と予報されている( /± )。

イ 5月中旬の巡回調査における発病果そう率は0%(平成0.1%)でやや低かった( /- )。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発病部位は直ちに摘み取り適切に処分する。摘果作業の際は発病の有無をよく観察し、発病果実を園内に残さないように注意する。

イ 過繁茂を防ぐため、新梢などの生育が旺盛な場合は、枝の配置を見直し徒長枝を整理する。

ウ 防除薬剤は落花25日後頃までは10日間隔で散布し、その後は約2週間間隔で散布する。降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。散布予定日に降雨が予想される場合は、降雨前に散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
4 炭疽病	早い( - )	平成並( - )

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平成並と予報されている( -/± )。

イ ふじの落花期はかづの果樹センター(鹿角市)が5月13日(平成差-4日)、果樹試験場(横手市)が5月7日(平成差-5日)だった( -/ )。

ウ 前年の発生量から、越冬伝染源量は平成並と推定される( /± )。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 園地の近くにあるニセアカシアは伐採する。

イ 二次感染防止のため被害果は見つけ次第、摘み取って土中に埋める。

ウ 防除薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
5 輪紋病	早い (－)	やや多い (－)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (－/±)。
- イ ふじの落花期はかつの果樹センター(鹿角市)が5月13日(平年差－4日)、果樹試験場(横手市)が5月7日(平年差－5日)だった (－/ )。
- ウ 前年収穫期の発生量から、越冬伝染源量はやや多いと推定される ( /+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 防除薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。
- イ 枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	早い (前年より早い)	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (－/ )。
- イ 前年収穫期の発生量から、越冬量は平年並と推定される ( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。
- イ 成虫は20～22時の気温が18℃以上になると産卵を開始するので、県北部では6月中旬から、県中央部・県南部では6月上旬からネオニコチノイド系剤などの殺卵剤を散布する。
- ウ 交信かく乱剤の使用を予定している場合は、直ちに設置する。
- エ 園地の周辺に放任園や防除不良園がある場合は、発生動向に注意して防除する。
- オ パーマチオン水和剤は、落花1か月後以降に使用し(サビ果)、高温時や衰弱樹に散布しない(黄変落葉)。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7 ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	－	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている ( /+)。
- イ 5月中旬の巡回調査におけるナミハダニとリンゴハダニの葉当たり発生頭数は、合計0頭(平年0.0頭)でやや少なかった ( /－)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア ナミハダニの発生の多い園地では、直ちに殺ダニ剤を散布する。
- イ リンゴハダニの発生が見られる園地ではバロックフロアブル(RACコード:10B)などを散布する。
- ウ 薬剤抵抗性の発達を回避するため殺ダニ剤は1薬剤1回の使用に限定し、かつ作用点が同一の薬剤も1回の使用とする。

エ ダニサラバフロアブル（RACコード：25A）、スターマイトフロアブル（同：25A）、ダニコングフロアブル（同：25B）は作用点が同一の薬剤であるため、いずれか1回の使用とする。

オ 以下の各薬剤を使用する場合は、次の点に注意する。

- ① オマイト水和剤は葉害（黄変落葉）が発生することがあるので8月中旬以降に使用する。
- ② コロマイト乳剤は、落花後1か月間（サビ果）、高温時（黄変落葉）に散布しない。また、パスポート顆粒水和剤及びストライド顆粒水和剤は本剤と混用しない（葉の黄変、葉裏の褐変）。
- ③ カネマイトフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にカネマイトフロアブルを希釈する（凝集の回避）。
- ④ マイトコーネフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にマイトコーネフロアブルを希釈する（凝集の回避）。
- ⑤ コテツフロアブルは、アリエッティC水和剤との混用で凝集が認められるので、攪拌しながら散布する。
- ⑥ ダニサラバフロアブルとアリエッティC水和剤又はカルシウム剤を混用する場合は、先にダニサラバフロアブルを希釈し、よく攪拌する（凝集の回避）。
- ⑦ スターマイトフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にスターマイトフロアブルを希釈する（凝集の回避）。
- ⑧ ダニオーテフロアブルを使用する園地では、銅剤（銅を含む製剤）を使用しない（銅剤と混用又は近接散布での防除効果の低下）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8 ハマキムシ類 (リンゴコカクモンハマキ、 ミダレカクモンハマキ、 リンゴモンハマキ)	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア 5月中旬の巡回調査における被害果そう率は0.3%（平年0.1%）で高く、同地点率は20.0%（平年10.7%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 防除薬剤は、ジアミド系剤（サムコルフロアブル10、エクシレルSEなど）、ディアナWDG、オリオン水和剤40のいずれかを散布する。

イ オリオン水和剤40は、落果のおそれがあるので開花後1か月間は散布を避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
9 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	—	多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア 防除適期決定ほ（4地点）における5月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の誘殺数の合計は178頭（平年83.8頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 園内への飛来時期や飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。特に、山間部の園地では注意する。
- イ 園内への飛来が多い場合は、アクタラ顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤、スタークル顆粒水溶剤、ダントツ水溶剤などを散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
10 キンモンホソガ (第2世代)	—	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア 前年の発生量から、越冬量は平年並と推定される ( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 被害葉は摘み取って適切に処分する。
- イ 発生が多い園地では、県北部では6月下旬、県中央部・県南部では6月上旬にモスピラン顆粒水溶剤やバリアード顆粒水和剤などを散布する。
- ウ パーマチオン水和剤は、落花1か月後以降に使用し(サビ果)、高温時や衰弱樹に散布しない(黄変落葉)。

## J なし(日本なし)

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 黒星病	—	平年並(前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている ( /±)。
- イ 潟上市予察ほにおける果そう葉の初発日は5月10日(平年5月17日)で早かった ( /+)。
- ウ 5月中旬の巡回調査における発病果そう基部率は0%(平年0.0%)でやや低かった ( /-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 発病部位は早めに除去し、園外へ搬出して処分する。
- イ 防除薬剤は10日間隔で散布し、降雨が続くと予想される場合又は発病している園地では散布間隔を7日とする。幸水は、本病に弱いので特に注意して防除する。
- ウ 有袋栽培の場合は必ず薬剤を散布した後に袋をかける。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2 黒斑病	—	平年並(前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている ( /±)。
- イ 潟上市予察ほにおける果そう葉の初発日は5月1日(平年5月17日)で早かった ( /+)。
- ウ 5月中旬の巡回調査における発病果そう葉率は0%(平年0.1%)、同地点率は0%(平年36.7%)でいずれもやや低かった ( /-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 本病の発生が多い品種は南水、八雲、二十世紀である。
- イ 不要な徒長枝は早めに剪去し、適切に処分する。
- ウ 袋かけ前の防除を徹底し、散布後、早めに袋をかける。
- エ 発生が予想される園地では、ナリアWDG（RACコード：11・7）、ユニックス顆粒水和剤47（同：9）を散布する。ただし、ユニックス顆粒水和剤47は単用せず、保護殺菌剤に加用して散布する。
- オ 多発条件下では、ポリオキシソール水和剤（RACコード：19）を保護殺菌剤に加用して散布する。ただし、耐性菌の出現を回避するため、ポリオキシソール剤の使用回数は3回以内とする。
- カ 防除薬剤は10日間隔で散布し、降雨が続くと予想される場合又は発病している園地では散布間隔を7日とする。

病虫害名	予報内容	
	感染時期	感染量
3 輪紋病	やや早い (前年よりやや早い)	平年並（－）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/±）。
- イ 潟上市予察ほにおけるいぼ病斑からの柄孢子溢出開始日は、5月21日（平年5月20日）で平年並だった（±/ ）。
- ウ 前年収穫期の発生量から、越冬伝染源量は平年並と推定される（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源であるいぼ病斑の多い枝は切除し焼却処分する。枝幹の病斑は6月中旬までに削り取り、直後にその跡部にトップジンMペーストを塗布する（塗布は3回以内）。
- イ 発病しやすい品種は、6月中旬までに袋かけをする。
- ウ 防除薬剤は10日間隔で散布し、高温、多雨の場合は散布間隔を7日とする。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4 シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	早い（前年並）	平年並（－）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（－/ ）。
- イ 前年収穫期の発生量から、越冬量は平年並と推定される（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 被害果は摘み取り、その日のうちに水漬けし、6日以上おく。被害果の摘み取り及び水漬け処分は幼虫脱出前の7月上旬まで全園一斉に行い、その後は随時行う。
- イ 成虫は20～22時の気温が18℃以上になると産卵を開始するので、県北部では6月中旬から、県中央部では6月上旬からネオニコチノイド系剤などの殺卵剤を散布する。
- ウ モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害のおそれがあるので散布しない（葉裏に黒色斑）。
- エ スミチオン水和剤40とパーマチオン水和剤は、高温時や衰弱樹に散布しない（黄変落葉）。
- オ 園地の周辺に放任園や防除不良園がある場合は、発生動向に注意して防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	—	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている ( /+ )。

イ 5月中旬の巡回調査におけるナミハダニとリンゴハダニの葉当たり発生頭数は、合計で0頭 (平年0.0頭) でやや少なかった ( /- )。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 不要な徒長枝は早めに剪去し、適切に処分する。

イ 発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を回避するため、殺ダニ剤は1薬剤1回の使用に限定し、かつ作用点が同一の薬剤も1回の使用とする。

エ コロマイト水和剤は葉が柔らかい時期 (5~6月) や高温・乾燥時、また、樹勢が弱っている場合は、葉に薬害 (黄変落葉) を生じるおそれがあるので散布しない。

オ ダニオーテフロアブル (RACコード:33) を使用する園では、オキシラン水和剤などの銅を含む製剤を使用しない (銅剤と混用及び近接散布での防除効果の低下)。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 ハマキムシ類 (リンゴコカクモンハマキ、 リンゴモンハマキ)	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア 5月中旬の巡回調査における被害果そう葉率は0% (平年0.3%) で平年並だった ( /± )。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発生が多い園地ではジアミド系剤などを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	—	やや少ない (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている ( /+ )。

イ 防除適期決定ほ (3地点) における5月1~4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の誘殺数の合計は11頭 (平年67.7頭) で少なかった ( /- )。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数も場所によって異なることから、飛来状況をよく観察して防除する。

イ 園内への飛来が多い場合はネオニコチノイド系剤、有機リン系剤、ピレスロイド系剤のいずれかを散布する。ただし、ピレスロイド系剤は6月下旬以降の使用とする。

8 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
アブラムシ類 (ユキヤナギアブラムシ)	—	平年並	平年並	シンクイムシ類、果樹カメムシ類と同時防除する。

K ぶどう

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 べと病	早い(—)	平年並(前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている( /±)。
- イ 果樹試験場(横手市)における展葉期は、キャンベル・アーリーが4月22日(平年差-8日)、巨峰が4月23日(平年差-10日)、シャインマスカットが4月28日(平年差-6日)だった(-/ )。
- ウ 5月中旬の巡回調査における発病葉率は0%(平年0%)で平年並だった( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア アリエッティ水和剤(RACコード:P7)は果粒が小豆大以降の散布で薬害や果粉の溶脱を起こすおそれがあるので、落花7日後までに使用する。
- イ ホライズンドライフフロアブル(RACコード:27・11)、オロンディスウルトラSC(同:49・40)は果粒が小豆大以降の散布で、アミスター10フロアブル(同:11)、ストロビードライフフロアブル(同:11)、フェスティバル水和剤(同:40)、ベトファイター顆粒水和剤(同:27・40)、ライメイフロアブル(同:21)、ランマンフロアブル(同:21)は果粒が大豆大以降の散布で、それぞれ果粉の溶脱を起こすおそれがあるので、その前に散布する。
- ウ 耐性菌の出現を回避するため、QoI剤(RACコード:11)、QiI剤(同:21)、CAA剤(同:40)、シモキサニル(同:27)を含む薬剤及びエトフィンフロアブル(同:22)の使用は1~2回とし、同一RACコードの薬剤を連用しない。特に、QoI剤の耐性菌が確認されている地域では、本剤をべと病防除薬剤として使用しない。また、ゾーベックユニベル顆粒水和剤(同コード:49・M3)は1回の使用とする。

病害虫名	予報内容	
	感染時期	感染量
2 芽枯病	早い(—)	やや少ない(—)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている( /±)。
- イ 果樹試験場(横手市)における展葉期は、キャンベル・アーリーが4月22日(平年差-8日)、巨峰が4月23日(平年差-10日)、シャインマスカットが4月28日(平年差-6日)だった(-/ )。
- ウ 5月中旬の巡回調査における発病芽率は、0%(平年0.8%)でやや低かった( /-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 発病枝は切除し、必ず焼却する。

- イ 開花期間に雨が多いと翌春に多発するおそれがあるので、オーシャイン水和剤（RACコード：3）、トップジンM水和剤（同：1）などを開花前に散布する。
- ウ 耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤の使用は1～2回とし、連用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3 灰色かび病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 5月中旬の巡回調査における発病葉率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 花冠、不受精果などの花器残さは成熟果での伝染源となるので、果粒肥大前（袋かけ前）に払い落とす。
- イ 発病花穂や発病葉のほか、落葉や芽かきした枝葉も伝染源となるため、焼却するなど適切に処分する。
- ウ 花穂の防除が重要であることから、開花前と落花後の散布間隔を10日以上空けない。
- エ 開花直前にゲッター水和剤（RACコード：10・1）、チオノックフロアブル（同：M3）、トレノックスフロアブル（同：M3）、フルピカフロアブル（同：9）、ロブラール水和剤（同：2）、SDHI剤（ネクスターフロアブル、パレード15フロアブルなど）（同：7）、ミギワ20フロアブル（同：52）のいずれかを散布する。
- オ 落花直後にゲッター水和剤、ジチオカーバメート剤、フルピカフロアブル、ロブラール水和剤、SDHI剤（フルーツセイバーなど）、QoI剤（アミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブルなど）（同：11）、スイッチ顆粒水和剤（同：9・12）のいずれかを散布する。
- カ 落花7日後にQoI剤、スイッチ顆粒水和剤、オンリーワンフロアブル（RACコード：3）のいずれかを散布する。
- キ フルーツセイバーは果粒が小豆大以降の散布により、ミギワ20フロアブル、カナメフロアブル、アミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブル及びスイッチ顆粒水和剤は、いずれも果粒が大豆大以降の散布により果粉の溶脱を起こすおそれがあるので、その前までに散布する。
- ク カンタスドライフロアブルは浸透性を高める効果のある展着剤や葉面散布剤を加用すると薬害（葉の白化）が発生するおそれがあるため混用しない。
- ケ チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルを除くエ～クに記した薬剤は、耐性菌の出現を回避するため、いずれも1回の使用に限定し、かつ同一RACコードの薬剤は連用しない。

病虫害名	予報内容	
	感染時期	感染量
4 晩腐病（花蕾発病）	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 前年収穫期の発生量から、越冬伝染源量はやや少ないと推定される（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 発病花穂は摘み取り、適切に処分する。
- イ 開花前にジチオカーバメート剤（ジマンダイセン水和剤、チオノックフロアブルなど）（RACコード：M3）、ゾーベックエニベル顆粒水和剤（同：49・M3）のいずれかを散布する。

ウ 落花直後にジチオカーバメート剤、ゾーベックエニベル顆粒水和剤、スイッチ顆粒水和剤（RACコード：9・12）、QoI剤（アミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブルなど）（同：11）のいずれかを散布する。

エ 落花7日後にオンリーワンフロアブル（RACコード：3）、スイッチ顆粒水和剤、QoI剤のいずれかを散布する。

オ アミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブル及びスイッチ顆粒水和剤は、いずれも果粒が大豆大以降の散布により果粉の溶脱を起こすおそれがあるので、その前までに散布する。

カ ジマンダイセン水和剤、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルを除くイ～エに記載した薬剤は、耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤の使用は1～2回とし、かつ同一RACコードの薬剤は連用しない。

キ チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルの幼果期～袋かけまでの散布は、果房の汚れや果粉の溶脱を起こすことがあるので注意する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
5 アザミウマ類 (チャノキイロアザミウマ)	早い(一)	やや多い (前年よりやや多い)

#### (1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている(－/+ )。

イ 横手市予察ほにおける黄色粘着板へのチャノキイロアザミウマの5月1～4半旬の誘殺数は0頭( 年0.0頭)で 年並だった( /±)。

#### (2) 防除上注意すべき事項

ア 発生が見られたら、グレーシアフロアブル(RACコード：30)、ディアナWDG(同：5)、テッパン液剤(同：28)、ピレスロイド系剤(スカウトフロアブル、バイスロイドEWなど)(同：3A)、ネオニコチノイド系剤(ダントツ水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤など)(同：4A)を散布する。なお、バイスロイドEWは小粒種ぶどうに登録がなく、大粒種ぶどうでのみ使用できる。

イ グレーシアフロアブル(RACコード：30)、ダントツ水溶剤は小豆大以降、モスピラン顆粒水溶剤やバイスロイドEW、ディアナWDG、テッパン液剤は大豆大以降の散布で果粉の溶脱を起こすおそれがあるので、その前又は袋かけ以降に使用する。

## L 飼料作物

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 アワヨトウ(第1世代)	－	年並(  年並)

#### (1) 予報の根拠

ア 糖蜜トラップ調査(2地点)における5月1～3半旬の侵入世代の総誘殺数は0頭( 年0.4頭)で 年並だった( /±)。

#### (2) 防除上注意すべき事項

ア 本種は飛来性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるので、今後の予察情報に注意する。

## IV. 気象予報

令和8年5月21日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（5月23日～6月22日）

(1) 予報のポイント

- ・ 暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高くなるでしょう。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

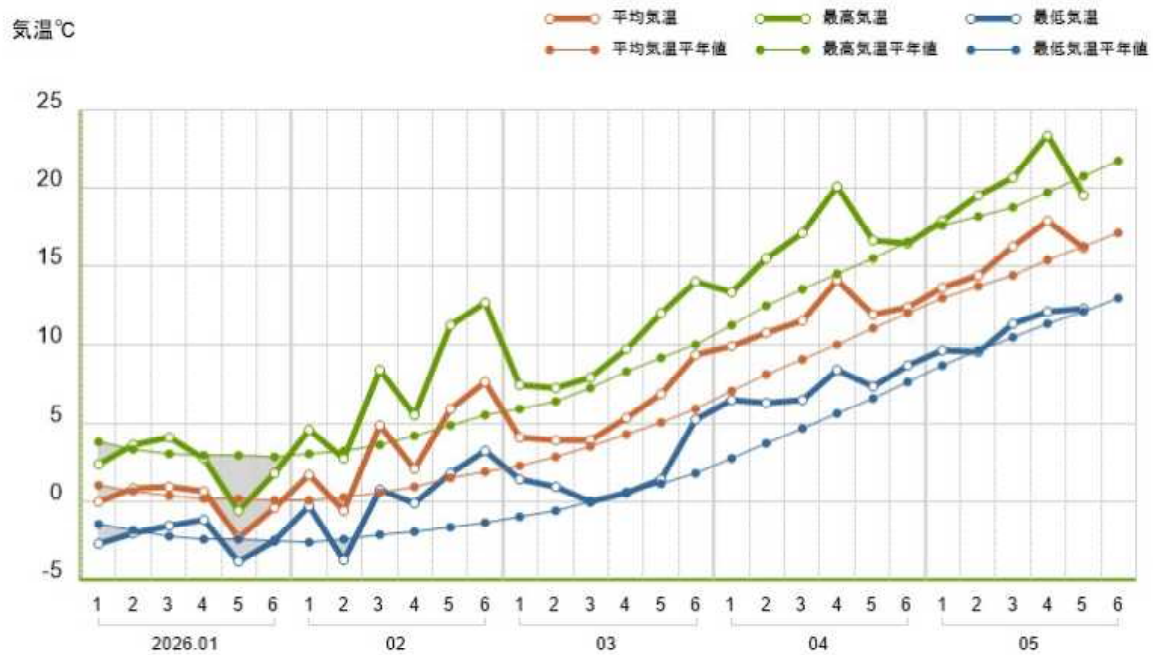
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10%	40%	50%
降水量	30%	30%	40%
日照時間	40%	30%	30%

(3) 気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

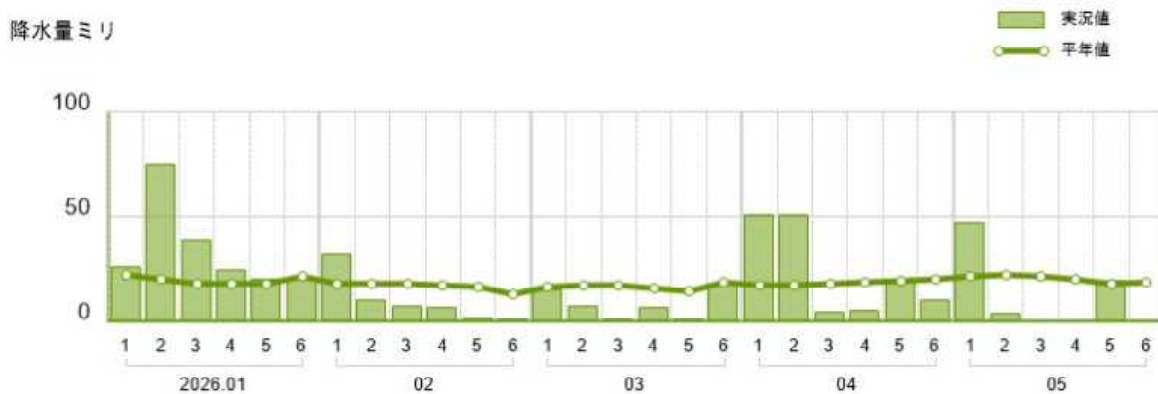
	低い	平年並	高い
5/23～5/29（1週目）	10%	20%	70%
5/30～6/5（2週目）	20%	40%	40%
6/6～6/19（3～4週目）	10%	40%	50%

## V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～5月5半旬 秋田県農業気象システムより)

### 気温の推移



### 降水量の推移



### 日照時間の推移



## VI. 用語の説明

### 発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

### 発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

			平年値 ↓			
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

### 予報内容の「-」

予報内容の発生時期や発生量の「-」（ハイフン）は、予察対象の病害虫が既に発生している、または、発生時期や発生量が不明なことを示します。

### 予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期の根拠の記号は「+」（プラス）が遅くなる要素、「-」（マイナス）が早くなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。発生量の根拠の記号は「+」（プラス）が多くなる要素、「-」（マイナス）が少なくなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。「空欄」は予報の根拠に関係しないことを示します。

### 気象予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上 (20:40:40)	高い(多い) 平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上 (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	平年並 ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

高い（多い）」、低い（少ない）と平年並が40%で高い（多い）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

### 半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

令和8年度秋田県農薬危害防止運動  
～農薬を安全に正しく使いましょう！～

6月1日から8月31日まで「農薬危害防止運動」の実施期間です。  
農薬の安全かつ適正な使用及び管理を徹底しましょう。

# 農薬の適正使用を徹底しましょう!

農薬の使用にあたっては、十分な注意が必要です。

**1 農薬に過度に頼らない防除を心がけましょう!**

健全な種苗や抵抗性品種の使用、防虫ネットや粘着板の設置、マルチによる抑草等、農薬に過度に頼らない防除を積極的に行いましょう。

**2 使用前には必ずラベルを確認しましょう!**

農薬のラベルに記載されている使用基準は必ず守らなければなりません。使い慣れた農薬でも使う前に必ずラベルを確認しましょう。

〇〇××フロアブル		農林水産省登録第△△△△号				
作物名	対象病害虫	使用回数	使用回数	本剤の 使用回数	使用回数	〇〇〇〇号 を含む農薬の 使用回数
トマト	アブラムシ類	2,000回	※1 ※2	収穫前日 まで	4回以内	150-200回/10ha 3回以内
	ハダニ類	1,000- 1,500回		収穫14日前 まで	4回以内	200-300回/10ha 3回以内

対象となる病害虫です。

記載されている方法以外では使用できません。

この回数を超えてこの農薬を使用できません。

記載されている濃度の範囲内で散布しましょう。

登録番号が記載されている登録農薬を使用しましょう。

使用できる作物です。記載されていない作物には使用できません。

記載されている希釈回数より奥濃度では使用できません。

使用できる時期です。記載されている時期以外には使用できません。

「〇〇〇〇」には有効成分名が書かれており、この成分を含む農薬は総使用回数を超えて使用できません。商品名が違っていても同じ成分を含む農薬があるので注意が必要です。

秋田県農林水産部



### 3 農薬の飛散(ドリフト)・危害防止の徹底を!

- ① 農薬を散布する場合は、周辺の住宅地や農作物に配慮し、事前に近隣住民等に知らせるようにしましょう。
- ② 風がない又は弱いときに散布し、風速が概ね3m/秒を超えたら直ちに散布をやめましょう。
- ③ 散布位置や散布方向に、他の農作物等がないことを確認し、散布の際は適正なノズルと圧力で行いましょう。
- ④ 養蜂が行われている地区で殺虫剤を散布する際には、養蜂業者と連携をとり、早朝又は夕刻に散布する等、ミツバチへの危害防止を徹底しましょう。
- ⑤ 農薬使用の際は適切な防護装備の着用を徹底しましょう。
- ⑥ その日のうちに農薬散布の内容を記録しましょう。

### 4 空中散布を行う際は適切な手続きを!

- ① ドローンや無人ヘリコプターで農薬散布する際は、機体の登録、飛行許可・承認取得等、所定の手続きを行いましょう。
- ② ドリフトや墜落等の事故が発生した場合は早急に報告してください。

### 5 農薬使用後は適切な方法で後片付けを!

- ① 使用後の噴霧機やタンク、ホース、ノズル等の散布器具はしっかりと洗いましょう。(洗浄液は排水路や河川等に流してはいけません。)
- ② 使用済み容器の中には農薬が残らないようにし、産業廃棄物処理業者に委託する等、適正に処分しましょう。  
(市町村や地域等が回収・処分している場合は、そのルールに従いましょう。)
- ③ 余った農薬は、別容器に移し替えたりせず、施設された場所に保管する等、保管管理を徹底しましょう。

～お問い合わせは、水田総合利用課、病害虫防除所又はお近くの地域振興局農林部 まで～  
秋田県水田総合利用課 TEL 018(860)1785 FAX 018(860)3898  
秋田県病害虫防除所 TEL 018(881)3660 FAX 018(886)3566



#### 問合せ先

秋田県病害虫防除所	TEL 018-881-3660	秋田県果樹試験場	TEL 0182-25-4224
秋田県農業試験場	TEL 018-881-3326	かづの果樹センター	TEL 0186-25-3231
		天王分場チーム	TEL 018-878-2251